銀魂　沖神ＳＳ～俺と私の高校生活

霧愛 華

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

沖田と神楽はお互いのことが好きなのにその気持ちを伝えられないまま高校生になった。

銀魂高校での日常ラブコメ…にしたいです

目　次

1．沖田と神楽の気持ち ―― 1
2、カグラと神楽の気持ち ―― 3
3、ＪＫと神楽の気持ち ―― 5
4、料理と二人の気持ち ―― 7
5、膝枕と2人の気持ち ―― 9
6、沖田と神楽の信じる気持ち ―― 12
7、噂と沖田の恋の視線と気持ち ―― 15
8、沖田と神楽、最強カップル誕生！ ―― 17
9、波乱の転入生 ―― 19
10、波乱のドラマ撮影 ―― 22
11、波乱の日常 ―― 27

1．沖田と神楽の気持ち

今年俺と俺の幼馴染は高校一年生になる。
俺らは同じ高校に入学することになった。
アイツの学力でどうやって銀魂高校に受かったのかは謎だがとにかく今日一緒に入学することになった。
姉に迷惑をかけないようにモデルをやっているため学校に入ったときに女子がキャーキャー騒ぐもんだから朝からうるさくて仕方がなかった。
「あー…女子ってめんどくせ～」
思わず口からこぼれる。ちなみに今は、入学式が終わりクラスに入り担任を待っているところだ。
「オイ、それ隣に女子がいるときにはくセリフかヨ。」
なぜだか、俺の隣の席になった俺の幼馴染こと神楽。
付き合いが長いのでキャーキャー言ったり赤くなったりしないコイツはハッキリ物も言えるし今一番楽な相手といって過言ではなかった。
「おめぇのことじゃねぇよ。ギャーギャー騒ぐメス豚どものことでぃ」
「はぁ、お前はもう少し女子慣れしろヨ。折角私も認めるイケメンなんだから、彼女くらい作ったらどうなのヨ？」
「その言葉そのまま返すぜぃ。一応は美少女なんだから、彼氏の一人作ってみやがれぃ」
むっ、っと言葉に詰まる神楽。実はずっと前から好意を寄せているのだが鈍感なコイツはまったくもって気づく気配がない。早くしないと誰かに取られてしまうと焦る気持ちと、振られてコイツと今より離れてしまったらガラスのハートが粉々になって立ち直れなくなってしまう弱い気持ちとで綱引き中だ。
ただ、こいつは目の色を隠すためにダサいメガネをしていたりするので心配は少ないのだが、いつか何かの拍子でメガネが落ちてコイツの素顔を男子が見たら一目ぼれ確定だろう。

うーんとうなっていると銀髪の天然パーマの先生が入ってくる。
ひとまず、この難題は後でにしようと心に決めた。
次々とクラスメイトが発表していくのを聞きながら私は考えていた。
彼氏…かぁ…幼いことからずっと好きな総悟。振られて離れしまうのが怖くてまだ意思表示は何にもできていない。
私…どうすればいいんダロ。告白できない理由は怖いからだけではなかった。
夜兎族だから、というのも大きな理由だったのだ。
本当は夜兎族は中国の遊牧騎馬民族の残りで普通の人間にはあり得ない運動能力を持っている。
戦うことに重点を置いている民族。人間への執着がなかったり、いつ死んでもいいことから恋愛なんてする人はなかなかいなかった。もしも、暴走してしまったら私は殺してしまうかもしれない。
そして、このことを総悟は知らない。パピーや神威にも合わせたことはない。
私がこの学校に必死に勉強して入ったのは銀八先生がいるから。
彼は全部知っている。私のことを。でも、さすがにこれは相談できないことだったー

2、カグラと神楽の気持ち

「はーい。いいよぉ～今日の撮影はこれでおしまいねぇ。お疲れさまぁ、いい写真がいっぱいとれたわよぉ」

学校が終わり雑誌の撮影を終えるとさすがに疲れが来る。

おかま口調のカメラマン岡本さんにあいさつに行こうと足を向けると会話が耳に入ってきた。

「うーん、やっぱりいないわねぇカグラ。本当にもうモデルはやめちゃったのかしら？また始めたって噂程度に耳にしたんだけどねぇ」

カグラ…というセリフに反応して思わず声をかける。

「岡本さんお疲れさまでした。あの…今はなしていたモデルの子って？」

世間話はしないたちの沖田に話しかけられ少しうれしそうに話し始める。

「カグラっていうのはねぇ。私がカメラマン始めた時に撮っていた少女でね。赤い髪に青い瞳。とても美しい少女で一躍有名になったの。その瞳は見たものを虜にし絶対に話さないってね。私の名が売れたのもその子がきっかけなんだけど…ある日突然消えてしまってね。モデル界では多くの人が衝撃を受けたのよ。最近またモデル活動始めたっていう噂を耳にしたんだけど…どの雑誌にも載っていないから違ったのかしらねぇ。また撮ってみたかったんだけど…」

赤い髪に青い瞳そしてカグラという名まるで俺の幼馴染のことを指しているかのようだった。

アイツが…モデル？確かに俺も認める絶世の美女だ。最近はそのことを口に出すようにしてほめているのだが…たまに暗い顔をするときもあったような…？いや、気のせいだろう。可愛いと男に言われて嫌な奴がいるわけがない。うん。

「へぇ、そうなんですかぃ。俺もぜひ見てみたいもんです、見たものを虜にするっていうモデルに。」

その頃の俺は、思ってもみなかっただろう。カグラというモデルの美しさを。

―一週間前　喫茶店にて

「…本気で言っているのか、神楽。その言葉の意味を分かっているんだろうな？」

いつになく真剣な表情で訴える坂田銀八。

「わかっているアル。それでも、こうしなきゃいけないネ。もう、逃げるのだけはご免被るヨ。」

先ほど神楽が銀八の顔を見るなりいったのだ。

「私、モデル再開するアル。もしも、これであの事件が解決するのであればどうなったっていいネ。」

あの事件―神楽が５歳の時にモデルをやっていて起きた誘拐殺人事件。

何日間も何人もの少女たちと監禁され暴力を振るわれた。

目の前で何人もの人が殺され、一番の親友が殺されたときについに神楽は壊れてしまった。

夜兎の力により一人で誘拐殺人グループを皆殺しにし体力の限界まで暴れまわった。

目が覚めたら病院にいた。事件については警察にすら語ることはなく、その事件がきっかけでパピーや神威がケンカし誰もいなくなってしまった。

殺し殺される恐怖。しかしそれ以上に５歳の彼女には誰もいない家、たった一人で母親の死を見届ける悲しみのほうが勝っていた。その、悲しみに苦しみに終止符を打ちたいとそう願う神楽の気持ちについに負けた銀八は承諾した。

「いいぜ。ただし、何かあったらすぐに俺に言え。いいか？絶対だぞ⁇俺とお前の仲なんだ。絶対遠慮すんなよ？

どんな些細なことだってな。」

沢山くぎを刺されて首をすぼめる神楽の頭にポンっと手を置いて優しく笑いかける。

神楽は、目からあふれる涙をしばらくとめることが出来なかった。

3、ＪＫと神楽の気持ち

銀ちゃんとの話し合いから二週間がたち、昔私のカメラマンを務めてもらっていた岡本さんに連絡しもう一度撮ってもらえるようにお願いした。案外簡単に同意してくれて、またモデルの世界に足を踏み入れることになった。

「はーい、もうちょっと顎引いてー。うん、そうそう。いいわぁ。やっぱりかわいい。よし、今日はこれで終わり！」

雑誌の撮影もだんだん思い出してきて安定して撮ってもらえるようになった。

っといってもやっぱり８時は超えてしまうので急いで挨拶して駅に向かう。

駅では女子高校生が雑誌を囲んで話していた。

「ねぇねぇ見て。沖田くん。かっこいいよねぇ―♡」

またアイツかヨ。ＪＫはアイツ以外に興味ないのか、っと突っ込みたくなるほどどこにいても聞く名前だった。

「ほんとかっこいいよねぇー。あっ、そうそう雑誌っていえばカグラ復活したんでしょう？」

一瞬びくっとする。一歩だけＪＫに近寄り声がよく聞こえるようにする。

「あー、噂の赤髪ちゃんねー。可愛いわよねぇあの子。私あの子だったら沖田君の隣ぎりぎり許せるわ。」

「それー、私もぉ、めっちゃかわいいよねぇ。少し分けてもらいたいくらい。」

ふふーん。と思わず得意げになる神楽。復活して間もないのにこんなに広がっているなんて。

きっといいことある。と思い電車で家に向かう。

私の予想は大はずれだった。

家の最寄の駅で降りると、後をつけられていることにしばらくたってから気が付いたのだ。

こんなところで、暴力なんて起こしたらきっと問題になってしま

う。何とかしなくては。と考えているうちに家の近くの公園まで来てしまった。足音が早くなる。思わず身が固くなり頭が回らない。
どうしよう、どうしよう、どうしよう。また誘拐されてしまうだろうか？怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。
目から涙が落ちる。もういやだ。モデル始めたとたんにこれだ。私には無理だったのだろうか。
過去を乗り越えるなんて不可能だったのだろうか。きっと次はない。殺されてしまうんだ。
銀ちゃん、総悟…こんなことなら告白すればよかった。
あと数歩できっと尾行していたやつは私に追いつく。これで終わり…そう覚悟した時だった。
後ろから声が聞こえた。
「おっ、やっぱり神楽だったぜぃ。」
振り返り確認すると総悟がたっていた。今一番合いたかった人。
安心すると涙が出てきて止まらなくなった。ギョッっとする総悟が心配そうに駆け寄って抱きしめてくれた。
今日はこれだけで、やっぱりいい日だったのかもしれないと思えた。

4、料理と二人の気持ち

「はぁ!?さっき見た子猫の映画に感動して泣いていただけぇ?…ちょ、おま俺の心配返してくれよ……」

「…しっ知らないアル。心配性のお前が勝手に勘違いしてただけの話ネ。ふっふん」

ふーん?とじっとこちらを見つめてくる総悟になんでかドキドキする。

いやいや、理由なんてとっくの昔に知っていたけど…

「まぁ、心配してくれたんだからお礼にこのまま夕飯食べて行けヨ。何か作ってあげるネ。」

とととっと音を立てて慌てて逃げていくアイツ。

岡本さんの話といい、泣いていたことといい最近なんだかアイツの様子がおかしいような気がする。

子猫の映画に感動して泣いていたはずがない。

そもそもあいつが映画をちゃんと見るはずがないのだ。最悪開始30秒で寝る。

…お前…本当はモデル…やっているのか?

もしそうなんだったら、お前はなんで俺に伝えないんだ?

っていうかなんで気づかないんだ?俺。

昔ものすごく有名なモデルだったならわかったはずなのに。

…?昔??そういえばこの家を取り囲んで、テレビの人が群がっいたような……

どんどん思考に入り込んでいく総悟。

それはいつになく真剣な顔でー

「できたアルヨ~。」

いつになくご機嫌な神楽。その手元には、ハンバーグが乗っていた。

「?いつ買ったんだ?弁当。」

さも当然とばかりに聞く総悟。青筋を立てる神楽。

「今作ったんじゃっ、ぼけぇぇぇぇぇっぇぇ!!!メイドイン神楽じゃっ

あほぉぉっぉぉぉぉ!!!!!」
思わず耳がキーンとなる。普段からほかの女子よりも高いソプラノをしているのに、それが家を揺らすかと思うほどの大声になったもんだから思わずクラクラする。
「っってめっ。超え大きすぎだろっ近所迷惑だわ、それに俺の鼓膜もう限界だわっ、ぼけっ。……っつーかジョークだよジョーク…いやマジで」
神楽の疑いの半目に冷や汗をたらしつつ弁解する総悟。
「仕方ないアルナぁ。特別かんナ。っつーか近所迷惑ってお前が近所なんだろが。」
確かにその通り。神楽の家の隣が総悟の家なのだ。
お互い家族がいないので一緒に夕飯を食べることも少なくなかった。
「ふぅん…お前結構料理うまくなったじゃん」
何気ない一言…のはずが神楽にはとても響いた。
(そりゃそうヨ。お前に認めてほしくて練習したんだからナ)
ペロッっと食べきる二人。
もう用はないはずが、一緒にテレビを見たりしている。
(あーぁ、このまま時間が止まって二人だけの世界に行けたら…)
と見事に同じことを二人で考えていた。
そんなことを考えながら、この町の夜は更けていくのだった。

5、膝枕と2人の気持ち

ポロロロン。
軽快な着信音が寝ているソファーを揺らす。
「……ん？」
窓から差し込む光と、鳥の鳴き声が朝を告げていた。
辺り見渡し限りの遊び道具の山。
漫画の山、お菓子の山、調子に乗った宿題の山、トランプ、ウノ…
まだ昨日の熱が冷めないとでも言うかのようだった。
起こされた原因である着信を確認する。
（…銀ちゃんからだ…）
銀ちゃんはモデル復活した私のマネージャーを務めてもらっている。
学校の先生との掛け持ちはきついだろうが、ギャラはたんまり払っているので文句は言わせない。
内容を確認すると「2時間後スタジオ」というおりのことが書かれていた。そろそろ準備を始めたほうがいいと思いソファーを下りようとすると…
「……なっ……そ、総悟!?」
重いとは思っていたが全く気にしていなかった膝の上には総悟が寝ていたのだ。
朝起きたら、ずっと片思いの相手が自分の膝を枕にして寝ていたなんていうことが早々あるわけでもないので、思わずじーっと見つめてしまう。
（……まつ毛長いアルナ…こうしていると本当にチワワアルヨ。小さい時から見慣れている顔。あの時は…隠し事なんて作らなかったヨナ…）
「ごめんネ…何も言えなくて。総悟に隠し事しててて…でもこれは私の勝負だから逃げるわけにはいかないヨ…いつか全部終わったら……聞いてネ？私の気持ち……」
いつのまにか口から出ていた言葉を最後だけ総悟の耳元で囁いて

から、額に唇を当てた。
「……ごめん…行ってきます…」
それから２０分もしないうちに家は総悟１人となった。
「……は？……」
熱い額の１箇所を手で押さえる。
本当に火が出ているのかと心配になるほど熱い。
『ごめんね』
と言いながら笑いかけてくる神楽の顔が何回も頭に流れる。
本当は神楽が起きる少し前から起きていたのだ。
ただ、起きたら好きな女の子の膝の上で寝ているなんていうラノベ的展開になれていないため、何分間かフリーズしてしまい挙げ句の果てに額にキスをされたのだ。
「……神楽の気持ち……？」
誰もいない神楽の家で額に手を当てながら呟いた総悟の声だけが木霊していた。
「…っというか…これでほぼ確定だな…神楽はモデルをやっていたんだ…でも一体どこで……？」
頭に流れる記憶…
「そうか！あの人なら知っているかもしれない!!」
この時を逃しまいと急いで電話をかけるのだった。
ー神楽　撮影後
「…カップルを想定した写真撮影!?」
額からながれる汗を拭きながら岡本さんから言われたことを思わず繰り返す。
「そうそう♪相手役の子は私が担当している今人気の男性モデルさんよ。彼の実力は私が保証するわ。どう？やってみない??」
「うーん…そうですね。岡本さんがそこまでいうならやってみましょう。知名度も上がるかもしれませんしね。」
モデル仕事中はアル禁止！と銀時からキツく言われなんとか標準語で喋るようにしている。
「…カップル想定…かぁ…」

思わず今朝のことを思い出す。我ながら額にキスするとは…
明日どんな顔出会うべきか悩む…
「…んにしてもまだデビューして間もないのにもうカップル想定かぁ…最近は早いねぇ…」
銀ちゃんが隣で呟く。それに対して一言言ってやろうかと思ったが、言葉が詰まった。
(デビューしてこの時期にカップル想定ってことは…私よりずっと前からデビューしている総悟は何回も綺麗なモデルさんたちと…そーいうシーンを撮っているということ…アルカ……?)
どんどん下がっていく心の気温にこれ以上下がらせてたまるか!とでもいうかのように心に中で叫ぶ。
(ううん!それなら…それに似合う女になるまでヨ!)

((今度の撮影頑張らないと……))

6、沖田と神楽の信じる気持ち

岡本さんから撮影の依頼を受けてから二週間が経とうとしていた…

「……んな!?」

今日が撮影当日…気合を入れて自室でポーズの最終確認をしていた神楽は、二週間前と同じ軽快な携帯の着信音で携帯を覗き込んで固まった。

『今日の撮影の相手役は、総悟だ。』

銀時からのメール内容はその一文だった。

その一文で、彼の焦りや不安が伝わってくる。

バレていた…思わず唇を噛む。

モデルをやっているということはそこまで隠す必要はない。

ただ、もしあの時のことが総悟にバレて嫌われてしまったら…と思ってしまうのだ。怖いのだ…本当は、とても。

少しして顔を上げた神楽は…何かを決意した様だった。

テレビで芸人が騒いでいる。

二週間前、神楽が出て行ってから俺は岡本さんに電話をかけた。

『カグラと撮影をさせてくれないか』

という内容の。彼は快く了解し、今に至るわけだが…

「さすがのアイツも相手が俺だって知った頃かな…」

アイツはどんな顔をするだろう…驚くだろうか……もしかしたら喜んでくれるかもしれない…

総悟の口は緩んでいた。

ピーンポーン…家のチャイムがなる。もう直ぐ出発の時間だというのに誰だろうか?

慌ててドアを開けに行く。

「どちら様で…」

「そう…ご……?どこまで…知って…るアル…カ……?」

開けた先に立っていたのは…神楽だった。

どこまで知っているのだろう。
総悟は……。
私は…私が幼い頃から心にしまっている思いを……もう諦めなくてはいけないのか……
込み上げてくる不安の涙のままに叫ぶより……彼と話をしたい…
そう考えていたら、隣の家のチャイムを押していた。
ねぇ…貴方は…どこまで知っているの？
開く扉の奥に現れたあいかわらずの美貌。
彼の瞳に私が映った時にわずかに見開かれる。
口から音が溢れる。
声になっていたかはわからない。
思いのままに彼に飛びついて、我慢できなくなった涙が溢れ出す。
ボロボロ涙がこぼれだす。それでも、彼を見つめる。
私を…信じて欲しくて。
たとえ彼が、全てを知ってしまっていたとしても。
私を信じて欲しいから。
ただ…信じて……伝われ……！
泣いている…。
俺の目に映った神楽は、今まで見てきたどのアイツよりも大人びて、不安そうで…そう…まるで、飼い主を探す子犬のような感じだった。
ただ、何を言うでもなく俺を映しているその瞳から逃れることはできなくて…空より青く遠いその瞳の奥に…今まで感じたことのない何かを俺は感じ取った。
助けて…でもない。苦しい…のような、寂しいのような。
でも、もっと決意に満ちている。
…あぁそうか…〝信じて〟欲しいのか…俺に。
何を…？なんてことは聞かない。
アイツが俺に隠してモデルをやっている理由。
そしてその奥にある何かに…アイツは立つ向かってる。

なら俺は…信じるまでだ。
何かに怯えるようにすがりついてくる神楽に、俺はしばらく優しく笑いかけ続けた。
……それが、今のアイツに対してできる精一杯の応援だと思いながら。

7、噂と沖田の恋の視線と気持ち

「ねぇ…これ見た？」
「見た見た!!ヤバいよね！」
一つの雑誌を囲んで盛り上がる女子。
その光景はどこへ行っても見るものだった。
テレビをつけても女子が騒いでいるその話題で持ちきり、といっていいほど何回も報道されていた。
話題に上がって一週間が経ってもその熱は冷めることを知らないようだった。
雑誌を覗いて見ると、大人っぽい赤毛の美少女とクールな美貌の少年が載っていた。
題名はー『カグラと沖田のカップルコラボ。』
小見出しに、〝あなたのハートを狙い撃ち〟と書かれている。
どうやら、小見出し通りにハートを撃たれた少年少女が性別も超えて雑誌を眺めているようだった。
誰もが沖田の燃える紅色の瞳から、神楽の天使の微笑みから、逃げることは許されなかったわけだ。
等の本人達はというと…
「うわぁ…すごいアルナ…まぁ、さすがは神楽様ってことだナ。」
と言いながら威張っていたり…
「神楽様だぁ？総悟様様の前でよく言ったのもだな…？」
なんて言いながら火花を散らしていたりする。
「…にしても本当にここまで盛り上がることかねぇ……」
半目でコーヒーを飲みながらテレビの画面を見てぼやく総悟。
ちなみに、ここは沖田の家だ。
…にもかかわらず、テレビ前のソファーでごろりと横になっている神楽。
総悟的にはとてもまずい状況だった。…いや、男子的には最高なのだが……ッ…!!
（まずい！とにかくまずい!!!見える見える見える…っつーか見えて

るッ！）
以前ならここまでは過剰反応こそしなかったが、例の一件が合ってから変に意識してしまうのだ。
…今までが少しおかしかったというのもあるだろうが……
平気を装いながらコーヒーを飲んでいるがテレビに向けているつもりの視線は、彼女の太ももやら、見え隠れしてしまっているピンクの下着やら、薄い布の下から盛り上がっている発達過程のひかえめな胸やらに散らばってしまっている。
「きれい…だな……」
気づかないうちにこぼれてしまった言葉に後悔する。
何が？と神楽は聞いてくるだろう…と構えているがいつまでたってもその言葉はこない。
気になって神楽？と呼んでみるが返事はない。
少しのぞき込むと、枕を抱いて顔を埋もれさせてねている彼女がいた。
残念ながら寝顔は拝めそうになかった。
本能的に手が伸びる。サラサラで美しい髪。近くで見るとより一層輝いて美しく見えるきめ細かい肌。
あぁ…本当に
「お前のすべてが俺の物になればいいのに…」
「ふぇ?!」
予想外の声に思わず手を退ける。
寝ていたと思っていた神楽は、少し起き上がり髪よりも赤い紅の美貌で震えていた…
その時今までの関係が崩れ去っていく音が聞こえた。
…そして、今まで待ち焦がれていた扉が開くような少しの喜びも……
ただ…彼は今はそれに気づく余裕などなかったが。

8、沖田と神楽、最強カップル誕生！

＜復習＞

「お前の全てが俺のものになればいいのに…」

ずっと思い続けていた、神楽とのカップルコラボは見事成功した。

訳ありでモデルをやっている神楽も、最近はモデルというものを楽しんでいるようだ。

何よりなのだが…思わず溢れた言葉に少しだけ後悔の音が聞こえたが…

「今の…どういう意味アルカ…？」

ふっくらとした桃色の唇からそう問われた。

こっちを見つめる熱を帯びた紅の瞳が、俺の気持ちを増幅させた。

「…そのまま…でさァ……神楽……」

今しかない……ずっと思い続けてた、この想いを伝えるのは。

「……ずっと、ずっと…神楽が…好き…なんだ……」

何も考えず胸の中からあふれ出した想いを言葉にした。

目の前の紅の少女の瞳が大きく開かれるのが、はっきりわかった。

そして、その瞳に涙が浮かぶのも。

「……本気…アルカ…？どっきり…とか…じゃ…ない…？」

「うん……」

見つめ合う。永遠のような気がした。

でも、伝わると信じていた。

すると、ずっと逸らさなかった視線をまぶたで遮り、一筋の涙が彼女の頬を伝った。

「私も…ずっと、総悟が好きだった…アル…」

今度は俺が驚く番だった。

まさか、こんな夢のような結末は望んでいなかった。

「……マジ…で？」

すると、目の前の少女はふふふと笑って、こくんと頷いた。

胸が高くなった。馬乗りの姿勢だったので、俺の前髪が彼女の額に当たった。

そのまま、引かれ合うように俺たちは重なった。
そんな俺たちを、月だけが静かに見つめていた。
今夜だけは、全て許されるように…

ーーーー

「へぇ……ここがＪａｐａｎか～」
桃色の髪を三つ編みにし、サングラスをかけた１７、８歳の少年はサングラスを外しながらそう言った。
「何格好つけてんだ、神威。」
あらわになった、美貌を悪戯に変えながら神威と呼ばれた少年は振り返った。
「そういう晋助も、ニホン楽しみにしてただろ。」
黒髪の片目眼帯をした、同い年そうな少年に向かってそう言う。
「さて…神楽は元気にしてるかね……」
飛行機が飛んでいく青空にそんな呟きが溶けて言った。
「おい、そろそろいくぞ。記者会見が始まる。」
「ハイハイ、晋助は真面目だなぁ…」

ーーーー

「世界の男性モデル、日本上陸……へぇ…」
ずずず…まるで何事もなかったかもようにお茶を吸う神楽にすかさず、総悟が突っ込みを入れる。
「いや…へぇってなんだ…へぇって」
すげぇことだぞ!?という総悟の声は、神楽には届かなかった。
「なんで……どう…して……」
目線がテレビに映る、２人の男性モデルに釘付けになったまま、小刻みに震えていた。
「……？おい…そうした？神楽…??」
「なんで……なんでッ、どうして、神威が…日本に…!!!」

9、波乱の転入生

「きゃー♡」
「こっち向いてぇ～」
　朝８：００、銀魂高校の校門には女子の黄色い悲鳴が響いた。人気海外モデル、カムイとシンスケが日本へ来日して間も無く、彼らは銀魂高校へ転入した。それから毎日校門には人だかりができている。
「あー、もう！キャーキャー、キャーキャーうるさいアルナ！」
　早くも教室の席に着いていた神楽は、窓から校門の有様を見下ろし溜め息を吐く。
「もう日常じゃねぇか…この異様な風景も。」
　机に頬杖をついている神楽に隣の席の総悟が話しかける。
「海外モデル…カムイとシンスケ……確かに凄い人気っぷりアル。」
　少し拗ねたように校門で手を振っている２人を見ながら呟く神楽。
「ほぉう？天下の神楽様じゃァなかったのかィ？」
「う、うるさいネ！」
　総悟の挑戦的な言葉を受けた神楽は、校門から総悟へと視線を移す。しかし、喧嘩をするつもりだったのだろう彼女は総悟の意外な表情に押し黙ってしまった。
「大丈夫でィ…今のままで自信を持っていいと思うぜィ。」
「うぐっ……」
　珍しく真っ直ぐに神楽を見つめる総悟に神楽は真っ赤になってそっぽを向いた。
「そ、そんなこと言われなくだって分かってるネ！……でも…」
　髪と同じくらい火照っている頬に浮く青い瞳が総悟を捉え、神楽は言葉を続けた。
「……まぁ…ありがとう…」
　眼鏡を外しているわけでなければ、男勝りなジャージを脱いでいるわけでもない。でも、ニコリと照れながら微笑んだ彼女に総悟は目を見開いて動けなくなった。
「…んだよ…俺……」

ー神楽の打ち合わせ中ー
「はぁ？私がドラマデヴューー!?」
「そうだ…お前にとオファーが来た。お前の名前が広まるいい機会だし、相手役は今をときめく大人気モデル『カムイ』だぞ！」
「なっ……！」
　早速バレたということなのだろうか。これは、カムイ…いや、神威からの挑戦状と見ていいだろう。それなら、答えは1つ。
「是非やらせてもらうネ！」

「へぇ…じゃあ神楽はＯＫ出したんだネ。何より何より。」
　事務所に置かれている書類を見ながら、神威は食べていた飴を砕いて呟く。
「お前…何企んでるんだ。」
　最近の相棒に違和感を感じた晋助が鋭い瞳で探りを入れる。
「別に？日本の人気モデルと仕事をしたいって言っただけだろ？」
「カグラ…か……」
　美しく笑った赤い髪の少女の写真を眺める。確かに魅力的だ。青い瞳、白い肌、繊細な顔立ち、人を惹きつける魅力。しかし、どれも似ているのだ。女性としての美しさを除けば神威と瓜二つだろう。
「…何か……あるよな…」
「ん？晋助なんか言った？」
「いや、何でもねぇよ。」
　カムイの相棒も長いが実際コイツのことを何も知らない。路地裏で喧嘩している時に出会った変な腐れ縁だ。
「じゃ、仕事行くぞ…」
「了解ー」

「カムイ…か…」
　神楽と同じ色の髪、同じ色の瞳、真っ白な肌…同性だったら区別がつかないだろう。
「一体…どういう関係何でィ…」

テレビに彼らが映ったときのアイツの反応は尋常じゃなかった。
まるで、死人が生き返ったかの如く。この世で一番会いたくなかった相手と再会したかの如く。
「神楽は…俺が守るッ！」

１０、波乱のドラマ撮影

「好きッ…好きなのッ！貴方のこと…愛しているわ…」
泣きながら、赤髪の少女は告白する。
「やっと…伝わった…俺も、君を愛してる。」
先ほどの少女と全く同じ色の髪をした美少年が、彼女を抱きしめる。
そしてー
「はい！カットー!!」
監督の声が響いた。
「お疲れ様、カグラ。君本当にモデル？演技力半端ないネ。」
先程まで抱き合っていた少年ーカムイが私に話しかけてくる。
「そんなことないですよ。カムイさんこそ流石って感じですね。」
ようやく慣れてきた東京弁で、カムイに返答する。
「いやぁ…2人ともすごいよー！今一番注目されてるドラマ…なんて言われてるんだから」
私が依頼を受けてから、私は必死に演技の練習をした。もちろん、多くの人に笑顔を分けるためでもあるがそれ以上に、カムイに馬鹿にされたくない一心だった。
その成果もあり、ドラマ撮影が始まった今こうして褒められているのだ。
「これからも頑張ります！」
＊
「それで？例のカグラという少女はどうなんだ？」
撮影前の楽屋で、相棒から急に振られた話題に思わず本音が溢れる。
「あー。写真よりずっと可愛かった…」
初めて会った彼女の顔を思い出す。
同じ色の髪。同じ色の瞳。そっくりな顔立ち。でも、女性としての色気、魅力、美しさ。たくさんの女性とコンビを組んできたのに思わ

ず見惚れた。
「は？どうした、カムイ。カグラに惚れたか？」
くくく…と楽しそうに笑う晋助。
どこかほんのり赤い頬を逸らす神威。
「ほっとけ……」
＊
「ちょ、待っ……ん、んん…」
家に帰るや否や総悟が彼女の口を塞いだ。
玄関に座り込みながら２人は唇を重ねる。
「ぷはっ…どうしたネ！総悟。」
やっと口を解放した総悟に、神楽が苛立ちながら問う。
「……なんでもねぇや。ただキスしたくなっただけでィ。」
顔を背ける総悟に神楽は合点がいった。
「あー、なるほど。つまり総悟はカムイさんに嫉妬してるアルナ。」
「ちょ!?何言ってんでィ！そんなわけねぇだろィ！」
クールなポーカーフェイスを今は真っ赤に染めている。
その姿に神楽は、ニヤニヤしながら続ける。
「へぇ…違うアルカ。じゃあ、次のキスシーンも……」
地雷を踏んだ。
そのことに気が付き口を閉じるがもう手遅れだ。
「キス…シーン……？」
辺りの気温が三度ほど下がる。
総悟の瞳が鋭くなるのを神楽が気付かないはずもない。
「い、いや…これは口が滑っただけで…」
慌てながら全く言い訳になっていない言い訳を述べる。
「……ご、ごめんアル。」
少し視線をずらしながら神楽は謝る。
「…じゃあ、これで許してやらァ…」
そう言うと再び総悟の口が神楽の口を塞いだ。だが、今回は先程とは違い神楽の口に何かが入ってくる。
（ディ…ディープキス!?）

そう思っている間にもどんどん舌が交わって行く。クチュクチュと立つ音と、上手く入ってこない酸素に頭がクラクラする。
気付かない内に繋いでいた手に力が篭っていく。
「はぁ…はぁ…」
口を離したというのに上手く酸素を確保できない。その上、初めてのディープキスで体に力が入らない。
「ねぇ？もう一回やってもい？」
上気した頬に紅の瞳。
心を揺さぶる色気が半端ない。
「もぅ…たくさん…した…ダロ……」
「ダメ…まだ…足りない……」
あーもう。これだからこの男は…
そうして、こんな彼に胸が高鳴る私も…
手遅れだ。
「仕方ないアルナぁ…」

［ｎｅｗｐａｇｅ］

「え。まだカムイさんが着いていない？」
撮影現場に来ていた神楽は、スタッフさんから告げられた言葉を繰り返してしまう。
「そうなの。ごめんなさいね。少し散歩していてもいいから、もう少し待ってて貰えるかしら。」
「分かりました。」
今日はこの撮影だけなので時間はある。
やる事も無いので、少し散歩をすることにした。

見たことないお店。
住んでいるところより少し田舎な風景。
散歩をしているだけで結構楽しかった。
…さっきまでは。

「ねぇねぇ、お嬢さん。俺たちとイイコトしない？」
「そうそうｗきっと気持ちいいよ。ぎゃっはっはーｗ」
それは私に絡んで来た三人の男たち。
撮影用にメイクをして貰ったので、眼鏡をかけたらダメだと判断した私はそのままの姿で出て来てしまったのだ。
「…私は忙しいの。悪いけど貴方達の相手をしている暇は無いわ。」
「あ？んだと？俺らに喧嘩でも売ってんの？」
切れたか。
心底バカバカしい。
本当面倒臭いなぁ…
股間に一発やったら逃げて行くだろうか。
「なになに？だんまり？俺らのこと怖くなっちゃったのー？」
「大丈夫。優しくするからさぁｗ」
そう言いながら1人の男が手を伸ばしてくる。
「下品な笑い方…あの人とは大違い…」
据わった目で神楽は彼らを見ていた。
その時ー
「ぐはっ！」
私に手を伸ばしていた男が吹っ飛んで行った。
「え……」
「クソッ、お前！誰にやってるか分か…」
どごん。
「う、うわぁぁあ！」
ボキ。
私に絡んで来た男たちは、全員奇妙な効果音を残して気絶して行った。
「お兄…ちゃん……？」
「！　神楽…」
男たちをいとも簡単に倒した少年は、神楽に抱きついた。
「大丈夫だった？怪我とか…してない？」
「へ、平気アル…カムイこそ大丈夫アルカ？」

「俺がこんな奴らに怪我するわけないじゃん。」
…確かに!!
「さ！戻ろうか。」
「うん…」

11、波乱の日常

「体育大会?!」

・

「そうだ、毎年六月に行われる一大イベントだ。今日あたり競技決めが行われると思うが…どうだ?出るか?」

「う、うーん…」

銀髪の天然パーマと、国語の先生らしからぬ白衣を着た男—銀八からの問いに、神楽は少し戸惑った。

「で、出たいアル…でも……」

「ま、日は強いだろうな。」

透けるような真っ白な手に、彼女は目を向けた。

室内にいる今も、神楽は肌を出しているところが少ない。

顔は瓶底眼鏡に半分隠されているし、制服の上からジャージ、スカートの下にもジャージ。

出ているところといえば、口元と手くらいだろうか。

しばらく黙った後、彼女は意を決したように口を開けた。

「…やめておくネ。今は仕事もやっているし、体は大事アル。」

「…わかった。実行委員には上手く伝えておく。」

「…ありがと。」

「なに、こんなもんお前の為なら何でもねぇよ。」

優しそうに笑う銀八に、神楽も笑みを作る。

ありがとう、と心の中で何度も呟きながら。

＊

「じゃあ、神楽ちゃんは体育大会に出ないの?」

「うん…ごめんネ。でも、精一杯応援するアル!」

「神楽が謝ることじゃないっす。それに、病気なら仕方ないっすよ。」

「うん。私たちが神楽の分も頑張るから…」

教室に戻り、神楽はいつも一緒にいる仲のいいメンバーと話していた。

話題は、先ほど銀八と話していた体育大会についてだ。

「ありがとう。姉御！また子！信女！」
「お礼を言うことじゃないっすよ！神楽」
お礼を言われた三人の少女は柔らかい微笑みを作った。
そして、神楽も。
そんな幸せな日常を彼女は送っていた。
＊
「ってことがあってネ。あ、神威は競技何にしたアルカ？」
撮影前。最早日課になりつつあるお喋りの時間を二人は過ごしていた。
「ん？俺がそんなくだらない事に参加するわけないじゃん。」
「えー!?もったいないアル！」
神威のセリフに神楽は顔を歪めて反論する。
「そんなこと言われたって、もう出ないって言っちゃったしなぁ…」
「もったいないアル…」
泣きそうに顔を歪める神楽に、さすがの神威も困ったように眉を寄せた。
神威が何か言おうと口を開いた時スタッフから呼び出しがかかった。
「行こうか。」
「…そうアルナ。」
＊
「どうして？なんで!?なんで私は…私は…!!」
「…もう、何も言わないでいい。」
「え…？」
止めどなく涙をこぼすヒロインに、神威はそっとキスをした。
その口づけはどこまでも優しいものだった。
「俺は…何があっても君を愛しているから。もう、泣かないで。」
「…私で…良いの？」
思わず見惚れてしまう優しい笑みを浮かべる神威に、神楽は唇に触れながら幸せそうな表情をして問う。
「もちろん。君じゃなきゃ…ダメなんだ。」

「…ッ！」
慣れた手つきで神楽の頬に触れる神威、その行為に喜びを感じる神楽。
その二人は、どこからどう見てもお似合いのカップルで。
「はい、カットー！」
甘い雰囲気を監督の声が切り裂く。
「ふぅ…ラブシーンって苦手。」
「そう？キスとか妙に慣れている感じがしたけど。」
「そ、そうかしら？あ、あはは…」
神威の妙な勘繰りに、神楽は総悟との関係をばらすまいと変な笑いをする。
変な反応の神楽に神威は逆に何かを感じてしまうが。
「もう、二人とも最高だね！このドラマ大成功間違いなしだよ!!」
（た、助かったアル…）
これで、話題を変えられる。
「ありがとうございます。残りもよろしくお願いします。」
［ｎｅｗｐａｇｅ］
ホームで女子が騒いでいる。
音楽を聴こうにも、イヤホンを家に忘れたので何となく女子の会話に耳を傾けた。
▪
「ねぇねぇ、このドラマ見てるー？」
グループの中の一人の女子がスマホを見せながら別の女子に聞く。
「あ、見てる見てる！本当にカグラって可愛いよねぇ。」
（当たり前だ。この前もすっげえ可愛かったんだぞ。）
自分しか知らない彼女の表情がある。それだけで、何故か幸せに思えた。
そしてそれと共に、次になんと言うか想像がついた。
「っていうか、カムイ様も格好良すぎぃ。この二人お似合いすぎて、やばいんだけどー」
「あ、まじソレ！やばいよね、この二人。本当に付き合っているんじゃ

ないかって思っちゃうくらい。」
そこまで聞いて俺は後悔した。
本当はこの落ちになることが最初から想像ついていたのに。
（神楽と付き合っているのは俺でィ。）
そうは思うものの、最近はどこへ行っても耳に入る話題はこんなもので正直少し滅入り始めていた。
そして、思い出すのは神楽と神威のキスシーンの話。
「あーもう、面倒臭え…」
総悟の呟きはホームに入ってきた電車の音にかき消された。
＊
「ただいまアルー。」
「おう、お帰り。」
付き合い始めてからこうして俺たちは一緒に飯を食べるようになった。
「今日もドラマ撮影だっけ？」
「そうアル。もうくたくたネ。」
ソファーに座りながらため息をつく神楽。
「にしても、すげぇ人気だな。このドラマの話を聞かない日なんてないぜィ。」
「本当アルカ!?…良かったぁ…」
大きな青い瞳を一杯に広げ目を輝かせる。
「なんでィ。知らなかったのかよ。」
「最近は、ホームで耳を傾ける暇もないネ。」
そういう彼女の横顔は確かに疲れているようだった。
「撮影はいつまでなんでィ？」
「もう直ぐで終わりアル。はぁ…長かった……」
「じゃあ、もうひと頑張りだ！応援しているぜィ」
にやりと不敵に笑う総悟。
一瞬遠い目で神楽は見つめてから同じように笑みを作った。
「もちろんネー！お互い、頑張ろうナ！」